

經濟論叢

第122卷 第3・4号

初期の三井大元方における簿外不動産追補会 計の解析	高 寺 貞 男	1
コンティンジェンシー・セオリーと組織間関係 論の環境理解	赤 岡 功	13
ヒューム経済理論の特質と意義	田 中 秀 夫	31
ジョン・グレイの交換銀行論	岸 徹	55
わが国における最近の地域所得不平等	綿 貫 伸 一 郎	75

昭和53年9・10月

京 都 大 学 經 濟 學 會

ジョン・グレイの交換銀行論

岸 徹

はじめに

ジョン・グレイは1799年、イングランドで生まれた。彼は少年時代、ダービシャー、レプトンで初等教育を受けたのち、14歳のときロンドンに出て製造＝卸売店に勤めた。しかし、ここでの仕事は彼の性格にあわず、年季があけるとチープサイドの大商店にやとわれた。この実務に携わりながら、彼は当時の経済界のさまざまな事件を注意深く観察していた。

1810年代後半のイギリスは、ナポレオン戦争の終結に伴う戦後恐慌の時代であり、生産過剰、失業、貧困等の問題に悩まされていた。彼は、現在の社会は「何かがまちがっている」と感ずるようになった。社会の諸害悪は、「人間の商業行為が自然の全体系と矛盾している」ことから生じたのだ、と彼は考えた。彼は、とりわけ、需要が生産の制限となっていることが諸害悪の原因だ、と考えた。「現在の事態は逆転さるべきである。生産が需要の結果であるかわりに、需要の原因であるべきである。」¹⁾

1) J. Gray, *The Social System; Treatise on the Principle of Exchange*, 1831. Kelley's reprint, 1972. Appendix, p. 340. 以下 System (『制度論』) と略記する。

ここでグレイの著作を挙げれば、以下のとおり。

1. *A Lecture on Human Happiness*, 1825. L. S. E. reprint, 1931. 以下 *Happiness* (『幸福論』) と略記する。
2. *Vom Menschlichen Glück*, Übersetzt von A. M. Freund, mit einer Einleitung von Georg Adler, Leipzig, 1907.
3. *A Word of Advice to the Orbistonians on the Principles which ought to regulate their Present Proceedings*, 1826. 以下 *Advice* (『忠言』) と略記する。
4. *An Efficient Remedy for the Distress of Nations*, 1842. 以下 *Remedy* (『救済策』) と略記する。
5. *The Currency Question*, 1847.
6. *Lectures on the Nature and Use of Money*, 1848. Kelley's reprint, 1972. 以下 *Lectures* (『講義』) と略記する。

ところで、従来の研究史の論点の1つは、彼の社会主義思想に変化がなかったかどうか、である。ほとんどの研究者は1830年代および40年代にグレイの思想に変化があったことを立証している。たとえばフォクスウェルは、『幸福論』を、「其時代の最も注目すべき、最も有効な社会主義の宣言書²⁾」としているが、グレイが年を経るにつれて商業的となって、ついに『講義』(1848年)においては「革命的社会主義の如何なる痕跡」もみられなくなったと言っている³⁾。

従って問題は、その画期をいずれに求めるか、という形で議論が展開されている。たとえばローゼンベルクは、パンフレット『忠言』が印刷された1826年⁴⁾、マックス・ベアは『制度論』(1831年)の頃から変化の兆しを認め⁵⁾、キンボールは『救済策』(1842年)によってグレイの改革案は貨幣的基礎にうつったと言っている⁶⁾。

これに対して、堀経夫氏は、グレイの諸著書のあいだに「相当な連絡」を析出しようとされている⁷⁾。鎌田武治氏は基本的にこの立場をつぐものと言ってよいであろう。氏はこう述べている。「[グレイは]その解決策として交換手段としての貨幣を財貨の生産と並行的に増加させて購買力を補給することに想到した。社会悪の解決におけるこの基本構想は終始変わることなく抱きつづけられたのであって、1830年までの著作ではこの基本構想にもとづく理想的社会像の構築に主力が注がれていたが、それ以後の労作のなかでは、彼はその現実的適用の段階的設定を試みつつ、けっきょく漸進的に理想に接近していくためには貨幣制度の改革から着手することが先決条件だという信念にとりつかれ、逆

2) H. S. Foxwell, Introduction to A. Menger's *The Right to the Whole Produce of Labour*, trans. by M. E. Tanner, London, 1899, p. XIViii. 森戸辰男訳『全労働収益権史論』, 弘文堂, 1924年, 389ページ。

3) *Ibid.*, p. 1. 邦訳, 同, 393ページ。

4) ローゼンベルク「経済学史」(2), 直井武夫・広島定吉訳, ナウカ社, 1935年, 409-10ページ。

5) M. Beer, *A History of British Socialism*, London, reprinted 1948, Part II, p. 216. 大島清訳「イギリス社会主義史」(二), 岩波文庫, 昭和45年, 89-90ページ。

6) J. Kimball, *The Economic Doctrines of John Gray 1799-1883*. Washington, D. C., 1948, p. 7. 尚, この点の指摘は鎌田武治「古典経済学と初期社会主義」, 未来社, 1968年, 282-3ページに負う。

7) 堀経夫「リカアド派社会主義」, 日本評論社, 昭和3年, 94-5ページ。

に現行貨幣制度の批判を通じて、彼自身の貨幣論の展開に没頭していったと解されよう。」

「したがって、前期の諸著書の論調が社会改革的であり、後期のそれらが原理的であるのも理由のないことではないが、それによって前期と後期との間に彼の思想の断絶があるとする解釈には即座に首肯しえない。」⁹⁾

このように、グレイ評価は論者によって種々様々である。だが、これらの議論は、グレイにおける「社会主義」とは何であったかを、見失っているのではないか。とくに、ローエンソールのように、グレイは「社会主義を排撃した」⁹⁾と言うばあい、まずもってその「社会主義」とは何かが問われねばならぬのではないか。グレイは「社会主義」と呼ばれる生産の組織化を、確かに自ら否定していた¹⁰⁾。だが、彼の意図はそうであったとしても、彼の実際の要求は、交換の組織化を通じての社会的労働の配分ではなかったか。

このことの再検討のために、本稿は、初期の諸著作を視野に納めつつ、とくに後期の代表作とされる『講義』を考察の対象とするものである。

1844年の銀行条例をめぐる議論が、以下に考察するグレイの時論的な背景となっている。そこから彼は理論問題としての「価値の尺度」を問題としたのであった。それは、労働が社会秩序の新たな編成原理となり、そのことによって貨幣が生産物の価値比率そのものを表示する単なる「名前」となることを要請するものであった(第I章)。そしてそれは彼の交換銀行において実現される

8) 鎌田, 前掲書318-9ページ。

9) E. Lowenthal, *Ricardian Socialism*, 前掲森戸訳書, 附録(四), 503ページ。

10) このことは、1842年以降のグレイにあてはまる、とぼくは考えている。

ここで、グレイにおける初期と後期について、簡単に私見を述べておく。

生産が必要によって制限されていることは、グレイの初期からの事実認識であった(たとえば *Happiness*, p. 62)。このことから生産が必要の結果ではなくて、原因となることが要請されたのであった。この意味では、この要請は初期から一貫してもちづけられたといえよう。だが、むしろ問題は、その要請がいかなる社会制度のもとで実現されうると考えたかであろう。『制度論』では明確に、交換の組織化と「国民的資本」のもとで、その要請が実現されるとしていた。だが、『救済策』および『講義』では、交換の組織化が前面に出でつつ、私的な生産と「結合した資本」との間を動揺しながら、この要請が実現されるとしたのではなからうか。交換の組織化を通じての社会的労働の配分、これが42年以降のグレイの語り出そうとしたことではなかったか(この点については本稿第三章を参照されたい)。

ものとして把握された。その銀行は無償信用を特徴とするものであった(第二章)。そうして最後に、グレイの「社会主義」を、交換の組織化を通じての生産の統制として把握したうえで、生産の組織化の基礎上で交換の組織化を図ろうとしたJ・F・ブレイと対照することによって、社会変革における2類型というシェーマを闡明しようとした(第三章)。

これらの課題を以下において考察しよう。

I 貨 幣 認 識

イギリス経済は1823～4年の繁栄の時期に次いで、25年には早くも史上初の循環性過剰生産恐慌をむかえることになった。これは多くの地方私営発券銀行とロンドンの個人銀行の破産を伴い、逆にこの破産によって恐慌そのものが強化された。このため内外から正貨の取付けがイングランド銀行に殺到し、同行の金準備は枯渇寸前の状態に追いこまれた。(この金融逼迫を背景に『制度論』1831年が書かれたことに注意!)これを機に銀行制度の改革(1826年と33年の銀行条例)が進められたが、この改革にも拘らず、恐慌は38～9年とひきつづきおこり、兌換の危機は依然として続いた。1839年3月から11月までの間に、イングランド銀行の正貨保有高は550万ポンド減少し、11月には127万ポンドになった。これを背景として、恐慌の原因と対策をめぐる通貨論争がたたかわされることになった。

通貨主義の主張がピール銀行条例(1844年)に結実化し、時代の勝利をかちとることになった。この銀行条例は1400万ポンドまでは金属準備額をこえて銀行券を発行することができるが、それ以上は同額の金属準備をもつこととした。

だが、47年恐慌にさいして、この銀行条例は恐慌を緩和するどころか、逆に激化させることになった。商業は支払手段を求めて逼迫したのである。このためこの銀行条例は効力を一時停止され、1400万ポンドという固定枠を取除くことを余儀なくされた¹¹⁾。

11) 以上の叙述にあたっては次のものを参照した。荒牧正憲、通貨主義・銀行主義、「経済学ノ

この銀行条例の根本欠陥は、金が価値尺度および価格の度量標準¹²⁾になっていることにある、とグレイは言う。そしてそのことによって、生産が無限の発展をとげるかわりに、逆に需要=貨幣によって制限されている、と言うのである。

「金を我々の価値標準に高めたその同じ議会議案が、以前にはその祖先、友および同一物であった生産を、需要の侍女に引き下げた。」¹³⁾

ここから金が「価値標準」であることをやめ、貨幣は単なる「代表物」(representatives)となることが要求されるのである。真の「価値標準」とは労働にほかならず、貨幣は労働生産物の単なる「名前」となることが要求されるのである。グレイが貨幣をいかに把握していたかを通じて、このことを以下に闡明しよう。

まず、貨幣の望ましい性質としてグレイは次のものを挙げる。

1. 耐久性。2. 運搬可能性。3. 分割可能性と便利さ。4. 質と重さの統一性¹⁴⁾。

現在の貨幣はこれらの諸性質を十分に満たしている。だが、現在の貨幣が満たしていない性質がただ一つある。それは「安価なこと」である。現在の貨幣制度を維持するために、年々1億ポンド以上の費用がかかっている。「流通の大車輪」たる貨幣にこれだけの費用をかけるのは無駄である。国内における貴金属鑄貨の節約は、それだけ多くの貨幣を外国貿易に充当できるであろう。こ

辞典」岩波書店、1965年。三輪梯三、産業資本主義段階における信用制度、「講座信用理論体系Ⅲ」、日本評論社、昭和45年。

12) とはいえ、グレイはこの両者を混同している。グレイは「価値尺度」、「価値標準」(standard of value)という用語で、あるときは前者を、あるときは後者を指し示している。

グレイは後に見るように、金は価値尺度としては、その価値が不変でなければならない(不変の価値尺度としての労働的要論)、価格の度量標準としてはその価格が可変でなければならない(度量標準確定の拒否)と主張している。だが、実際は逆である。

金は、価格の度量標準としては、その価格が可変でなければならない、というグレイのこの主張は、一定の重さの金に対して単に計算名を固定することを、このように誤解したものである。

13) J. Gray, *Lectures, op. cit.*, p. 71.

14) *Ibid.*, pp. 62-4.

うして現在の貨幣制度がその高価さの故に批判されるのである。

「既述の我が貨幣制度は、安価さという木質的な性質を欠いている。我々は我々のがらくたに余りに多くのものを支払ってきた。……我々がその有害ながらくたを取り除くのが早ければ早いほど、それだけ良い。」¹⁵⁾

ところで、グレイによって解かれる貨幣とは、第1に価値尺度、第2に流通手段、第3に世界貨幣である¹⁶⁾。

「度盛り (scale) や目方 (weight) に加えて、長さの尺度や容積の尺度に加えて、我々は価値の尺度をもたねばならず、それによって……人と人との全取引が続行されるのである。そしてまた我々は交換道具をもたねばならない。」

まず価値の尺度について。

価値の尺度がなければ、「商業は商業であることを止め、社会は社会であることを止めるであろう。そして全文明種族は未開状態へ戻るであろう。」¹⁷⁾

つまりここでは、「文明」社会を「未開」社会から区別するものは、生産物が商品としてその価値を評価されることであり、そしてこのことによって「価値の尺度」が「文明」社会に固有のものとして把握されているのである。

だが、「文明」社会＝現在の貨幣制度の下では、「価値の尺度」は何によって可能であるのか。それは、議会の条例によって金の価格を一定の値に固定することによってである。たとえば、1オンスの金を3ポンド17シリング10ペン

15) *Ibid.*, p. 65. 力点はグレイ。

16) もとより、グレイはこの3者を論理的体系的に展開しているのではないが、この序列にそった説明の仕方を与えている。これは重商主義者が世界貨幣→流通手段→価値尺度という序列において展開したのと対蹠的である。グレイにとってまず第1に問題であったのは、貴金属を価値尺度に、価格の度量標準にしている現在の貨幣制度に対する批判であったのである。以下ではこの「価値尺度」にかんするグレイの把握を考察する。

尚、世界貨幣としての貨幣、あるいは蓄蔵貨幣の規定については、*Lectures*, p. 187, および *System*, pp. 77-8. 参照。

17) *J. Gray, Lectures, op. cit.*, p. 61. 力点はグレイ。

ス2分の1というように。

ここで問題は二重である。第1に金の価格を法律で固定することは不可能なこと。それ故、第2に金を「価値尺度」にすることは不可能であること。

第1について。金も単なる一商品にすぎない。その価値＝価格はその生産に支出された労働の量によって決まり、決して一定たりえない。

「金は価値尺度ではなく、それ自身単なる一商品にすぎない。その価格は、他の諸商品によってはかられて、実際は他の物の価格と同様にひんばんに上下する。」¹⁸⁾「他の諸商品によってはかられて、金の価格は固定されているのではなく、実際は固定できないものを法律によって固定している。」¹⁹⁾

ここでは次のことが語り出されている、すなわち金の価格は「他の諸商品によってはかられて」いない、つまりそれ自身によってはかられて、固定されている、ということである。そしてこの故にグレイは、金も単なる商品として、その価格が他の諸商品によってはかられ、かつ固定されないことを要求し、ここから「価値尺度」機能を金から剝奪することを要求するのである。

第2について。金がもし「価値尺度」であるとすれば、財が増えれば貨幣も増えなければならない。さもなくば、財はその価値を実現しえないから。だが、金は、財が増えるに応じて、自由にその量を増やすことができるか。否である。

「金は……他のあらゆる物と適切に比例して増大することのできない少数の商品の一つである。」²⁰⁾

とすれば、金のような貴金属を「価値尺度」にすることは、貨幣の価値＝価格に作用を及ぼし、従って商品の価格に影響を与えることになり、このような貨幣は「価値尺度」としては不適格だとされるのである。たとえば、財が増大

18) *Ibid.*, p. 154. 力点はグレイ。

19) *Ibid.*, p. 230. 力点はグレイ。

20) *Ibid.*, p. 79.

このグレイの事実認識が誤解に基くものであることは既に指摘した。註12) 参照。

したとせよ。金としての貨幣はそれに照応して増えることはできない、つまり貨幣量は減少する。そうなれば貨幣の価値は上がり、商品の価格は下がるであろう²¹⁾。こうして、貨幣としての一定の量が商品に対して、ある固定された価値比例におかれなことをもって、「価値尺度」としての金が拒否されるのである。

「それをつくるのに同じ量の労働を費させ続けるような、全体としての市場生産物の増加が、その生産物の貨幣価格を引き下げるとすれば、貨幣は……価値尺度たりえない。」²²⁾

以上の2点から、貴金属が「価値尺度」となることが拒否されるのである。

「我が議会の価値尺度は、何と全く馬鹿げていることか！……それは破壊の道具である。」²³⁾「真の愚かさは、一つの物を他のすべての物の価値尺度にしようとする我々の馬鹿げた試みにある。」²⁴⁾「我々の現制度の狂気は、貴金属を交換道具として用いることにあるのではなく、貴金属を価値尺度にする試みにある。」²⁵⁾

それでは、真の「価値尺度」とは何か。それは労働である。労働こそあらゆる物の価値尺度にほかならない²⁶⁾。

21) この通貨学派の主張について、グレイは次のように言っている。「財が貨幣よりも速い割合で増加するときはいつでも価格が下がるという事実は、現存する貨幣制度を支持するまさにその人々に完全によく知られている。」*Ibid.*, p. 83. すなわち、グレイは、通貨学派の主張を逆用して、通貨学派を批判するのである。

22) *Ibid.*, pp. 80-1. 力点はグレイ。

23) *Ibid.*, pp. 81-2. 力点はグレイ。

24) *Ibid.*, p. 185.

25) *Ibid.*, p. 188. 力点はグレイ。

26) このことは既にスミスの述べるところである。グレイ自身もスミスから次の文言を引いている。「それゆえ、労働はいっさいの商品の交換価値の実質的尺度なのである。」*A. Smith, An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations; in the Works of A. Smith, LL. D. vol. II, Aallen Otto Zeller 1963. p. 44.* 大内兵衛・松川七郎訳「諸国民の富」(一) 岩波文庫、150ページ。但し、力点はグレイ。

「それゆえ、それ自体の価値がけって変動しない労働だけが、いつどのようなところで

「人間の労働が同時に源泉であり、標準であり、また唯一の可能な価値尺度である。」²⁷⁾「労働が唯一の真の標準であり、唯一の真の価値尺度である。」²⁸⁾

こうして「価値尺度」機能が貴金属から剝奪され、それが「労働」に移されるとき、そこに現出する世界は、一方における労働生産物＝商品の世界、他方におけるその「証明書」(certificates)としての貨幣の世界である。今や実在するものはあれやこれやの商品である。他方、貨幣はそれら商品の定在を指し示す単なる「名前」であり、この「名前」はこれら諸商品を単に代表するにすぎない「代表物」にほかならない。今や労働が価値の実体であり内在的尺度であるのだから、この単なる「名前」は諸商品の価値比率そのものを直接に表示することになる。諸商品は、労働時間を度量単位とする単なる名数的関係として存在する。

「貨幣は商品でもなく、また受領書 (receipt) の性質を正確にもったものでもない。銀行券は、要するに、標準市場にもちこんだ財産が存在するという、それだけ多くの証明書であろう。」²⁹⁾「諸商品の貨幣価格は単に名前にすぎないのだから、上述の諸商品は、我々がそれらに与えるのが適当だと考える何らかの名前によって十分安全に呼ぶことができる。」³⁰⁾

そうしてまた、自己の生産した労働生産物が今や貨銀となり、その貨幣価格もそこにそれだけ生産された物の単なる「名前」となるのである。

「彼自身の労働の生産物がとにかく労働者の実質貨銀となるであろう。これ

も、それによっていっさい商品の価値が評価され、また比較されるところの、窮極の、しかも実質的標準である。Ibid., pp. 48-9. 同上156ページ。力点はグレイ。

尚、スミスの不変な価値尺度論については次のものが示唆的であった。野沢敬治、スミス価値論における社会認識の構造(上)、小樽商科大学「商学討究」第28巻第3号。

27) J. Gray, *Lectures*, op. cit., p. 155. 力点はグレイ。

28) Ibid., p. 157. 力点はグレイ。

29) Ibid., p. 125.

30) Ibid., p. 164. 力点はグレイ cf. *System*, op. cit., p. 63.

に対して彼の週貨幣賃銀は、その生産物がそれと呼ばれる単に名前となるであろう。』³¹⁾

一方における現実的労働生産物、他方における観念的名前の世界。それは、労働を、この世界を新たにつくり、編成し直す原理とすることによって、可能となったのである。労働が新社会の形成原理となることによって、貨幣は単に名前となるのであり、そのことによって貨幣は直接に諸商品の価値比率そのものを表示することになるのである。

この世界を実現するもの、それがグレイの交換銀行である。以下においてこれを考察しよう。

II 銀行制度論

「生産が需要の原因である」とは、ジェームズ・ミルもマカロックも既に述べていた。だが、果たしてそうであろうか。現実にそうなのか。それが妥当するのは、現在の貨幣というものがまだ発明されていない時代だけではないのか。商品は生産されている。だが、その生産に相当するだけの需要が常に存在するであろうか。商品はいつも、貨幣が商品を買うことができるように、貨幣を買うことができるであろうか。否、である³²⁾。ミルやマカロックの見落としたもの、それは、彼らの命題が貨幣の存在しないところでのみ妥当するということだ。彼らはあるべき社会を現在ある社会と混同している、とグレイは言う。

31) *Lectures, op. cit.*, p. 161. 力点はグレイ。

32) ミルについてマルクスは次のように言っている。「商品と貨幣とが直接対応しあい、それらが直接交換されるというこの考え方全体は、単純な購買と販売の運動から、つまり購買手段としての貨幣の機能から抽象されたものである。すでに支払手段としての貨幣の運動においては、商品と貨幣とがこのように同時に出現することはなくなっているのである。」K. Marx, *Zur Kritik der politischen Ökonomie, Marx-Engels Werke*, Bd. 13. Dietz, 1961. S. 155. 武田隆夫他訳「経済学批判」岩波文庫、243ページ。

グレイは購買手段としての貨幣と支払手段としての貨幣を明確には簡陋的に区別することなく、商品と貨幣を同時に、しかも比例をもって出現させようとした。これが彼の交換銀行の課題であったのである。

「彼〔マカロック氏〕とミル氏は同様に次のことに気がつかなかった。この問題についての彼らの議論の文句はすべて真であるべきであるのに対し、その文句 (syllable) はすべて実際は間違っているということだ。」³³⁾

ここから、「生産が不変の一樣な需要の原因」となるような、あるべき社会が、貨幣制度の変革を通じて展望されることになる。グレイの意識にあっては交換の組織化＝「貨幣の組織」(Monetary Organisation)が現在の社会を救う唯一の「救済策」(remedy)であった。そしてこのために現在の貨幣制度に付け加えられた「唯一の新しい特徴」が、「貨幣の利子」取得を不当とする無償信用論にはかならなかった。このことを以下に考察しよう。

グレイは、現在の生産はそのままにした上で、交換の組織化をはかるべく、ロンドン、エディンバラおよびダブリンにそれぞれ「標準銀行」を設立することを提唱する。この「国民銀行」は「紙幣部門」と「金属部門」とから成り、銀行自身の代理店および政府と業務取引をする。「紙幣部門」はそれぞれの代理店に貨幣を発行し、そこから貨幣を受け取り、その取引関係を帳簿に記載し、代理店を監督する。「金属部門」は金貨、銀貨および銅貨を、必要に応じて全代理店に発行する³⁴⁾。

また、これら三銀行は、その代理店を通じて、卸売り業を営む商人、製造業者に、一定の条件のもとで「貨幣」を融通する。すなわち、この銀行は「商品倉庫」をもっていて、商人・製造業者（これをグレイは「標準商人」と呼んでいる）は自己の生産物をこの倉庫におさめる。彼らの価格³⁵⁾の申告に基いて、銀行は帳簿をつける。そしてその額だけの貨幣を前貸しするのである。この貨幣たるや、既に述べたように、倉庫に納めた生産物の「証明書」であり、またそこにある他のすべての等価物に対する「指図証」(orders)でもある。

33) J. Gray, *Lectures, op. cit.*, p. 66. 力点はグレイ。

34) *Ibid.*, p. 176.

35) この価格は「直接費」(「原料費」+「支出された労働の価格」)+「商業委員会によって決められた百分比すなわち利潤」からなる。J. Gray, *System, op. cit.*, p. 64.

「生産物は、あらかじめ評価価値をつけてこれを銀行に寄託させ、必要なときにはいつでもこれを引き出させるが、そのさい、ただすべてのものの合意によって、なんらかの種類³⁶⁾の財産をこの提案された国民銀行に寄託するものは、自分が寄託したと同じものを引き出す義務はなく、価値が等しいものでさえあれば、銀行にあるものはなんでも引き出してよい、という条件をつけておく。」³⁶⁾

こうして、かかる貨幣が国民銀行によって発行されることにより、第1に、生産は需要の原因となる。というのは、一方における財の形成が、他方における貨幣の形成となり、この貨幣はいつでもどこでも、この財に対する同量の需要となるからである。

「標準市場にある全財産の価値は、公衆の手中にある標準貨幣の量に正確に等しいであろう。かくて生産は需要によって等しくされざるをえない。」³⁷⁾

従ってまた、第2に、貨幣が生産物を担保として発行されることによって、貨幣は過剰に発行されることはない。現在の間違った貨幣制度の下では、貨幣の発行は、生産物の生産によって規制されるかわりに、逆に生産物の生産が貨幣によって規制されていた。そのために、生産物はずねに「商品をおびやかすあらゆる暴風雨」にさらされざるをえなかったのである。だが、今や事態は逆転する。今や貨幣の発行は、生産の制限となるかわりに、生産の結果となるのである。

「現在のように、財の増大を貨幣の一時的な供給によって調整するかわりに、貨幣の増大を財の増大によって調整せよ……。』³⁸⁾「追加の一ポンド紙幣が存在する前に、1ポンドの価値物 (worth) がそれに先行しなければならぬ

36) *Ibid.*, pp. 67-8.

37) *Lectures, op. cit.*, p. 177. 力点はグレイ。

38) *Ibid.*, p. 77. 力点はグレイ。

い。」³⁹⁾

しかも、単に貨幣の発行が生産物の生産によって規制されるだけでなく、両者は「比例のとれた増大」として存在しなければならない。すなわち、財が2倍になれば貨幣も2倍に、財が10倍になれば貨幣も10倍になるように⁴⁰⁾。そしてこれが、グレイによれば、唯一の「救済策」であったのである。

また、かかる貨幣が発行されることによって、第3に、商品は直接的に一般的労働時間の体化物となる。すなわち、現在の制度の下では、貨幣が商品を買うようには、商品は貨幣を買うことはできなかった。各商品は「命がけの飛躍」によってのみ、自らの価値を実現することができた。だが、今や、商品はいわば一般的等価物となることによって、いつでも自らの価値を実現しうることになった。商品は直接に、社会的に一般的な労働時間の化体となったのである。

「貨幣を財と交換するのに十分な自由はあるが、財を貨幣と交換する自由はない。前者は全く容易であり、後者は全く困難である。だが、交換の自由が真に樹立されるときはいつでも、総体として、財を貨幣に転化することは、貨幣を財に転化するのと同様に、まさに容易となるであろう。」⁴¹⁾

39) *Ibid.*, p. 206. 力点はグレイ。

40) かかる把握の原因が、彼の「価値尺度」の理解にあることは既にみた。本稿第1章61-2ページを参照されたい。

41) *Ibid.*, p. 219. だが、商品が直接に一般的労働時間の体化物となるこの要求は、実はブルジョア的生産形態の破棄であるわけではない。しかし、グレイはブルジョア的な生産形態をそのままにしておいて、「貨幣の組織」だけを主張しているのである。つまり、主産物は商品として生産されなければならないが、商品として交換されてはならない、と言うのである。だから、彼は、ブルジョア的な生産形態を根底から覆えず協同組合の必要を、この時点(1848年)では認めていない。「私はあなた方の採用のために、協同組合の計画(combunative scheme)を提案しているのではない。我々は我々の年収入を1億そこら増すために社会の再構成を必要としない。」*Ibid.*, p. 90. 力点は筆者。

これに対してJ・F・ブレイにとっては、この「社会の再構成」そのものが、社会的権力獲得の問題として、問題とされたのであった。これについては次章参照。

尚、ブレイの「社会的権力」の概念については、拙稿、社会変革と政治革命—ジョン・フランシス・ブレイ研究序説—(名古屋大学「経済科学」第25巻第2号)第二章参照。

ところで、上述の国民銀行はいかなる信用制度をつくり出すであろうか。グレイによれば、それは「スコットランドのキャッシュ信用制度」によく似ている。

「スコットランドの銀行家は、彼自身の満足のために、商人から、たとえば1000ポンド——その額全部を商人は自由に処理できる——の範囲で担保を受けとる。そしてこのように銀行によって与えられた融通の額に年5パーセントの利子がかかけられる。」⁴²⁾

グレイの提唱する「標準銀行家」も、同様に担保を必要とする。だが、この銀行制度の下では、商人は、その担保がどれだけであれ、手持ちの財庫の価値額だけの貨幣を銀行から引き出すことができる。また、標準銀行家は「彼自身の満足のために」、彼自身の判断や意見あるいは貪欲に基いて貸付けをおこなったり拒否するのではなく、一定の規則に従って貸付けなければならない。

「提案された標準銀行家もまた担保を、たとえば1000ポンド必要とする。だが、彼のばあいには、その性質は法律によって決められていて、彼自身の自由裁量に委されていない。しかし今や商人は、彼が銀行に与えた担保量がどれだけであれ、彼の手持ち財庫(stock)の全価値だけ——しかしそれ以上ではない——、銀行から貨幣を引き出すことができる。」⁴³⁾

また、この制度の下では、貸倒れは「普通に用心していれば、決しておこることはない。」

「標準銀行家の法律上の条件は、担保に適用できて十分厳密であるので、貸倒れは全然ありえない。」⁴⁴⁾

42) *Ibid.*, p. 259. 力点はグレイ。

43) *Ibid.*, p. 239. 力点はグレイ。

44) *Ibid.*, p. 258.

さらに、この制度の下では、標準銀行家は「利子」なるものを要求することはできない。標準銀行家によって貸付けられる貨幣は単に「代表物」にすぎなかった。そのかぎり、この貨幣は無価値なものであって、価値あるものは生産物である。従って、この無価値なものの貸付けによっては、標準銀行家は利子を取ることはできないのである。

「すべての貨幣は……代表物でなければならないのだから、貨幣の単なる発行者は必ずしも何らかの価値の貸手ではないのであり、従って彼はその使用に対する利子を得る権利は皆無である。」⁴⁵⁾

無償信用！これこそは、グレイが現在の銀行制度に導入しようとしている「唯一の新しい特徴」そのものであった。それは、商品が直接に一般的労働時間の体化物となることを要求する必然的な帰結であった。それは、貨幣が単に「受取証」(voucher)となることを要求する必然的な帰結であったのである。

III 交換の組織化と生産の組織化

—社会変革の2類型・グレイとブレイ—

グレイにとってもブレイにとっても、貨幣は等しく「受取証」(voucher)であった⁴⁶⁾。だが、両者において相違するものは、その「受取証」がいかなる社会制度のもとで機能するものとして把握されたか、である。グレイにあっては叙上の如く、現在の生産をそのままにしたうえで、交換の組織化＝「貨幣の組

45) *Ibid.*, p. 192. 力点はグレイ。この「貨幣の利子」に対して、グレイは「資本の利子」を区別している。「貨幣の利子」とは上述のように、標準銀行家による無価値な紙幣の貸付けに対するものであるが、これに対して「資本の利子」とは、たとえば、商人が自己の価値ある物＝資本を他人に貸付けるばあい、それは、もし自分が持っている価値を生むのだから、それが利子を生み、かつその利子が取得されることは正当だとしている。「彼〔たとえば製造業者〕の手中にある1000ポンドの額は彼自身の財産の代表物なのだから、この貨幣を貸す行為はまさにその量だけの資本を、平価で借手に移すことである。その資本は、その所有者によって保持されていれば、一定の収入源となるのだから、他の人に移されるばあい、その使用と引きかえに正当な利子率を生む資格が明らかにある。」*Ibid.*, p. 192. 力点はグレイ。すなわち、銀行は自己自身の財産を持たぬが故に、利子をとることはできないのである。

46) J・F・ブレイの貨幣論については、さしあたり前掲拙稿第四章を参照。

織」が主張されている。なぜなら、生産が需要の原因となっていない理由を、グレイはただ「間違った貨幣制度」にのみ求めているのだから⁴⁷⁾。

「移転しうる受取証に基いて貨幣制度を樹立すること。」これがグレイの第1の眼目であった。この貨幣制度の樹立によって、全般的な過剰生産は消滅するであろうが、部分的な供給過多 (glut) = 「不比例な (disproportionate) 生産」は残存するであろう⁴⁸⁾。というのは、生産は、何ら組織化されないうで、諸個人の「競争」に委ねられるのだから⁴⁹⁾。だが、この「不比例な生産」も一時的であり、一方の「供給過多」が他方の「不足」によって相殺され、常に正確に釣り合いが保たれるのである。こうして需要と供給とは、総体としては、一致する。

「これら〔食物、衣服、住居、家具等々〕の等しい比率が市場にもたらされねばならず、さもなければいくつかの物の供給過多となるであろう——しかし、それはあらゆる場合に他の物の相応する不足によって、正確に釣り合いを保たれるであろうが。」⁵⁰⁾

これが、グレイによって主張された、交換の組織化に基く需給の一致 = 生産と消費の一致であった。それは一方で標準商人から商品を受けとり、他方で貨幣を発行する「標準銀行」によって可能となるものであった。もとより、それは生産の組織化を意図するものではなかった。が、しかし、この銀行は同時にまた、常に生産物が販売されうるという条件をつくることによって、生産そのものを統制しようとしたのではなかったか。というのは、そこでは商品は直接

47) 「釣り合いのとれた (proportionate) 生産が現在、需要の原因でないのは、全くただ我々の貨幣制度の性質のせいである。」 J. Gray, *Lectures, op. cit.*, p. 67.

48) 「そのときからは不比例な生産が何らかの余剰 (superfluity) の唯一の原因となるであろう。」 *Ibid.*, p. 118. 力点はグレイ。

49) この「競争」を、「分業」とともに、次のようにグレイは評価している。「我々が人間の資質、人間の技芸においてこれらの進歩を受けるのは社会科学のどんな原理のおかげであるのか？分業と、あの卓越したあらゆる物の主要源泉一人と人との個人的競争との双方のおかげである。」 *Ibid.*, p. 42. 力点はグレイ。

50) *Ibid.*, p. 35.

に一般的労働時間の対象化されたものとなり、この故に全般的な過剰生産は存在しないのだから。

このことはまた、『救済策』においても次のように明確に述べられている。

「標準ストックの現在の状態が……2, 4, 2, 4, 2, 4という数字によって表わされるとすれば、釣り合いのとれた供給は……3, 3, 3, 3, 3, 3となることを要求するであろう。」⁵¹⁾

つまり、供給過多（これは4という数字で表わされる）や供給過少（これは2という数字で表わされる）があったとしても、「釣り合いのとれた供給」はすべてを3にすることによって、総計 $18=18$ となり、過剰生産は相変わらず存在しないことになっている。

だがしかし、待て。この議論は第1に、あらかじめ総計 $18=18$ とすることによって、過剰生産の存在そのものを否定している。そして第2に、この議論は、すでに過剰な生産物を生産する部面から、過少な生産物を生産する部面へ資本が移動する、しかも社会的総労働の6分の1という比率で移動することを前提している。つまり、社会的労働の配分が計画的に行なわれていることを前提している！

グレイはこの『救済策』を発行するにあたり、1つの「修正」をほどこした。それは、『制度論』で展開したプランが、容易にかつ迅速に実行される⁵²⁾ためのものであった。そして『制度論』はただ「交換の原理を説明するかぎりでのみ役に立つにすぎない」、それ以外のものは「取り消した cancelled」⁵³⁾と、彼は公言するのだ。だが、それにも拘らず、『救済策』において、彼は「国民資本」(p.215)という観念をひそかにもちこんでいる。そこでは更に「一種の

51) *Remedy, op. cit.*, p. 114. 力点はグレイ。

52) *Ibid.*, Preface, xi.

53) *System, op. cit.*, To the Reader, 1842年。

第2政府」が語られ、そのもとで「諸個人の資本を使用する仕方がやや変わるであろう」と語られ、更に「工業と商業の全制度に革命的变化を起すこと」さえ語られているのだ⁵⁴⁾。

だからグレイは、私的な生産と「国民的資本」のあいだを動揺しているのだ。グレイの意識にあっては、ただ交換の組織化が語られたにすぎない。だが、それは同時に、社会的労働の配分を、生産の統制そのものを語り出すことになってしまった。これが1842年以降のグレイの特徴である、とぼくは考えている。

これに対して、この同じ需給の一致を、明確にかつ意識的に生産の組織化の基礎上で展望したのが、ほかならぬJ・F・ブレイであった。彼にあっては過剰生産および失業は、ほかならぬ生産-分配-消費の有機的連関を形成することによって解決される問題であった。そこでは「競争」は、一方に富の蓄積を、他方に貧困の蓄積を生み出す「未制御の自己愛」として、揚棄されねばならぬ当のものであった。その理想の「共同体」へ到るための必然的な一通過点が、現在の原理と将来の原理を同時に併せもつ「株式会社」(joint-stock company)であった。そこでは「一般委員会」、「地方委員会」および「各会社の監督」によって、全社会の生産-分配-消費の有機的連関が形成されるよう意図されていた。それは「自己管理」に基く社会的生産有機体の主張にほかならなかった。そしてこの下で、「国民銀行」によって「受取証」が発行されたのであった。すなわち、その時間紙券論は、ブルジョア的な生産形態そのものを覆えすことを前提していたのである⁵⁵⁾。

これに対して、ブルジョア的な生産形態をそのままにしたうえで、交換の組織化を図ろうとしたものこそ、J・グレイであった。だが、グレイの実際の要求は、彼の意図をこえて、このブルジョア的な生産形態そのものを問題とするに至るほかなかったのである。交換の組織化を通じての生産の統制、かかるものとしての新たな社会の形成、これが彼の交換銀行の課題であったのであり、

54) *Remedy, op. cit.*, p. 133.

55) この点については前掲拙稿、とくに第五章を参照されたい。

彼の「社会主義」の内容であったのである⁵⁶⁾。

我々はここに、生産の組織化の基礎上で交換の組織化を主張する立場と、交換の組織化を通じて社会的労働の配分を主張する立場という、社会変革における2類型を見出すことができるのではあるまいか。

結 語

以上の考察から、グレイが闡明しようとしたことは次のように要約できる。

第1に、グレイの時論的な関心が、サー・ロバート・ピールの銀行立法に結実化していく通貨学派的主張を批判することにあつたこと。グレイの批判は、その銀行立法によって貨幣が不足していることに向けられていた。この貨幣不足の原因を、グレイは、貨幣量よりも生産物の方がより急速に増大すること求めた。ここから提示しえた彼の解決は、生産物の生産の結果として、しかも比例して貨幣が発行されることであった。それを彼は貨幣の「価値標準」という理論問題において把握したのであった。

そこで第2に、この「価値尺度」機能が貴金属から剝奪されて、労働に与えられることになる。労働こそあらゆるものの本源的な「価値尺度」であったのである。そうなると貨幣は、労働生産物の定在の単なる「証明書」となるのであり、同じ等価物に対する「指図証」となるのである。今や貨幣は単なる

56) グレイがこの「講義」を行なっていたのは1848年2月22, 24, 29日および3月2, 7, 9, 14 および16日。そしてこの「講義」が出版されたのが同年7月3日。「講義」と時を同じうして、大陸フランスでは2月革命が勃発し(24日)、その委細をグレイは、1848年5月27日付『エコノミスト』紙を通じて知ったようである。そこに彼は、ルイ・ブラン、E・シュー、E・アラゴ、M・シュヴァリエ、E・ド・ジラルダン、F・パスチア等の名前を見出し、「国民協会」(National Society)、「交換銀行」を見出しつつも、彼らの実際の要求は交換の組織化である、と言っている。「彼ら[フランス人]は労働の組織を探求していると公言するが、実際に探求していることは組織された交換制度である。」*Lectures, op. cit.*, p. 254. footnote. 力点はグレイ。また、彼は自己の提案をフランス「臨時政府」に送ったが、受けいれられなかったということである。*Ibid.*, p. 247. footnote and p. 285.

尚、当時のフランスの動きについては次のものに教えられた。佐藤茂行、フランス初期社会主義と信用改革、(北海道大学「経済学研究」第28巻第1号、1978年3月)、阪上孝、二月革命と「社会主義」、(「思想」645号、1978年3月)。

「名前」として、生産物の価値の比率を直接に表示するものとなる。一方における現実的労働生産物、他方におけるその観念的「名前」の世界。それは、労働をこの世界の形成原理とすることによって、可能となったのである。

第3に、この世界が交換の組織化＝交換銀行によって実現されること。グレイにあっては、生産の形態はそのままにしたうえで、交換の組織化を図ることが唯一の「救済策」であった。すなわち、生産物は商品として生産されなければならないが、商品として交換されてはならない、と言うのである。商品が貨幣を買うことが、貨幣が商品を買うと同様に、容易となること、これがグレイの交換銀行の課題であった。だが、それは、グレイの意図をこえて、生産の形態そのものを問題とせずにはおかなかった。それは交換の組織化を通じての社会的労働の配分という問題に帰着せざるをえなかった。これに対して、J・F・ブレイは、この商品生産の形態そのものを揚棄し、生産の組織化のもとで交換の組織化を図ることを主張したのであった。ここに我々は、政治権力を媒介することなく、交換の組織化と生産の組織化という問題において、直接に社会を変革しようとする社会変革の2類型を見出すことができるのではあるまいか。

(1978年5月22日)